

保育巡回相談を担い始めて

田代 和美

ある地域で保育巡回相談を始めて半年になる。短い時間だが、子どもたちの生活の場における楽しさ、特に子どもたちと一緒に給食を食べさせていただけの園でそのひとときは、慌ただしい日常を送る私にとってオアシスのような時間になっている。心から信頼している人と過ごすことで屈託なく自分を表現している子どもたちの姿を目にしたり、悩み、迷いながら、園で過ごす日々が子どもたちにとってよりよい方向に進むためにど

うしたらよいかを模索している保育者の方々と話し合うことは、今の私の大きな糧になっている。多くの園では、先生方から今の子どもたちの様子についての話を聞き、私とその日にみた様子と併せて明日からの方向性を探っていくような話し合いになっている。保育者が一番困っていること、悩んでいることを中心に話し合いが進んでいく。子どもたちの昼寝中、しかもその間をほかの保育者に担ってもらっていることもあって、長

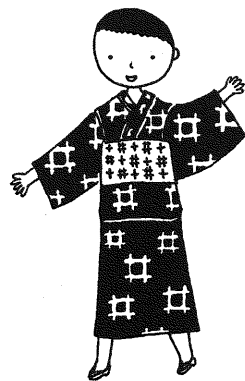
く時間をとれない中で話し合いは、貴重な時間である。一つの園を頻繁に訪れることができないために、できる限りお互いに心残りがないようにしたいと思う。時間をおいてその園を訪れたときに子どもの表情や行動に大きな変化がみられたり、子どもと保育者とのやりとりがしつとりとしたものに変容しているときなどは、子どもの育とうとする力に驚かされるが、保育者のもつ力にも驚かされる。

しかしその一方で、私がしていること、私の役割は何なのだろうと自問自答することも多い。前回こういう風に私が言ったからというような言葉を聞くと、ああそんなこと話したなあと記憶を辿り、それが大きな節目になるとはそのときは思いもよらずに話した言葉が漠然と思い出される。保育者はいつと、前はこういふ風に言っていたよねえと私が話すと、ああそうだったかもしれないというように記憶を辿る姿がみられる。話し合いの中では、相手の言葉を受けて自分が思いもよらなかった

たようなことを話したりすることもある。そしてまた不思議なことに、相手の話を聞くことにエネルギーを傾けてしまうためか、自分の話した言葉を思い出すことは難しい。進めていく中で、間隔を空けて同じ園を訪れるときには、私の言葉を憶えている保育者と、保育者の言葉を憶えている私とが出会うという構図になっているのではないかと思うようになった。対話の経験は「私の考えと他者の考えとがただ一つの同じ織物を織り上げる」のであり、「それらの言葉は、われわれのどちらが創始者だというわけでもない共同作業のうちに組みこまれてゆく」(メルロ＝ポンティ)ということを感じ始めたのである。そのため、その対話もしくは鼎談の中で作っている織物が時間の経過とともに消え去らないように録音し、文字化して留めて、園にもフィードバックすることにした。まだ始めて間もないために、それがどのような影響をもたらすのかは定かではないが、少なくとも自分の語りを検討することはできるだろう。

こう書き進めてくると、いかにも順調に事が滑り出しているかのようであるが、決してそうではない。ある園を初めて訪れたときには、それまでになく居心地の悪さを感じてしまった。二歳児のクラスに気になる子どもが三人いるということで訪問したのだが、部屋には「一」と書かれた習字が並べて貼ってあり、またその日は広い場所に移動して遊んだのだが、コンビカーをこいだり走り回って遊んだあとに、命令ゲームと称するゲームを行なった。「どこどこをさわってから、何々をぐるっと回って帰っておいで」というような保育者の命令によりいどんで走って行って、その通りに行動するというものであった。わかる子どももいればわからない子どももいて、その姿を見て保育者は「ちよーつと難しかったかあ」と笑っていた。給食の時間にはお当番の子どもが前に出て「スーブはありますか?」「ごはんはありますか?」などと聞いて、いただきますの挨拶をしていた。お昼寝の着替えは自分でロッカーからカゴを運んできて、着替え

たものは自分でたたむように促され、またロッカーに自分でカゴを運んでいた。子どもが名字に“さん”“くん”“づけ”で呼ばれること、身体接触や行動を共にしてもらうことが少なく言葉の指示が大半であることなど、大で乳児保育の授業をしているときに話している二歳児の姿とはかけ離れた子どもの姿がそこにはあった。「なぜ?」という疑問だらけの状態だった。保育者が気になる三人の子どものうちたまたまその日は二人が休みで一人だけが登園していたが、その子どもは確かに発音は不明瞭ではあるが、特に大きな問題があるとは思えなかった。その空間とその場を支配している雰囲気に対



する問題意識の方がそれを遙かに上回っていた。

当然、ほかの園での保育者との話し合いのようには話し合いの織物は織り上がらない。

初回の話し合いには、その日のリーダーを担っていた保育者は参加せず、一番ベテランの保育者とその子ども様子についての話すことから始まったが、その後、私がいまいろいろ疑問に思ったことを問う形になってしまい、結局のところ保育者間に考え方の相違があることや非常勤職員が多い中で保育者同士が話し合う時間をもてないなどの園の状況が語られた。それでも、その後、園内でそのクラスの保育についての検討はなされたようだ。次回にその園を訪れたときには、前回と異なり、子どもたちはそれぞれが好きな遊びを展開していたようであったが、前回リーダーを務めていた保育者は、気になる子どもの零歳児からの様子や問題を保育中に詳しく私に説明した。その日の保育の中でも大声で叱り、泣きわめく子どもを抱きかかえて部屋の外に出したり、いき

なり遊びを終了させてしまい、訳がわからずに泣く子どもに非常勤保育者がかかわって気持ちを上手に切り替えたりする様子を見て、受け入れがたい感情にとらわれる私が出た。保育者が何に価値をおいて、子どもの育ちをどのように見通しているのかがわからないところで簡単に是非を問うことはできないと自分に言い聞かせつつ、しかし、肯定できない自分がいることは否めなかった。

その日はその保育者との話し合いであったために、どのように話をしていったのか迷いつつ話し合ってしまった。録音を起こしたものは、読むに耐えないものであった。疑問に思いつつも「なぜ？」とストリートに問えていない。問うと詰問的になってしまうのを恐れることだ。具体的な子どもの行動について話を深めつつも、肝心なところで突き詰めずに話をそらしてしまう自分もいた。相手を批判的にみていることを悟られたくないからである。まずは良い関係をつくらなくてはと頭の片隅で意識しつつも、実際には批判的に見てし

まっているために、話が焦点化されない。保育者もやりとりの中で、いろいろと言葉を選んで説明し、「こういうこと？」という私の聞き返しに、そうじゃないと違う言葉で語っているのだが、かなり矛盾したことを話しており、結局のところお互いが通じ合えたという感覚をもたずに言葉だけが行き来しているようで、何も織り上げられなかったといえるだろう。受け入れがたい感情に振り回されてしまう未熟な自分を認めざるを得なかった。

臨床の用語でいう逆転移の状態に陥っている自分を何とかしなくてはと、様々な本を読み漁る中で、尾崎新の『ケースワークの臨床技法 「援助関係」と「逆転移」の活用』に出会った。尾崎は「基本的に、人は物事や状況を『見たいようにしか見ない』し、『判断したいようにしか、判断しない』。観察や理解は、そのようにはじまる。そのような観察や理解を適切なものとする方法は、観察や理解をどのような視点や感情から行ったのかを、まずは明確化することである」と述べている。これ

に沿って考えてみたが、なかなか難航した。相手に対する強い感情を自分の元に引き戻すことは難しい。さらにそれまでは子どもを真ん中において話し合うことができなかったので不問にされたきた、巡回相談のクライエントは誰なのかという問題にもぶつかってしまった。しかし、もともと私自身が、子どもの姿には保育者のありようが大きな影響を与えるという見方で、保育相談においては保育者という大人を通して子どもの育ちを援助するという援助観をもっているから、自分のありようと切り離して子どもの問題をとらえる保育者に対する受け入れがたさを感じているのではないか。そしてまた、私が支配関係を嫌うことから、保育者の子どもへのかかわり方が、子どもに言うことを聞かせるという一方向性をもっていることに対して受け入れがたさを感じているのではないか。何とかこの二点を絞り出した。

尾崎に準ずれば、次にそれらの見方や動機とは異なる別の種類の視点を加える事になるのだが、これはさらに

難しいことであった。保育者は子どもの姿を自分と切り離してとらえようとしているのではなく、自信がないために、子どもを発達の道筋に早く乗せていくことを仕事だと思おうとしているのではないか。子どもの姿を自分と切り離しているのではなく、日々、長時間を共に過ごす中で、母親が往々にしてそうであるように、子どもと一体化してしまい、自分の影響が見えなくなっているのかもしれない。自分の努力を認めてほしいのかもしれない。今のところ浮かぶのはこのあたりである。もちろんまだ出会ったばかりであり、今後これらは修正されることになるだろう。しかし、批判的に見るだけでは前に進めない。これから先も保育相談を継続していく中で、自分の理解や判断が自分の感情で偏らないように、保育者の話をまずは聞こう。その上で、私も自分のもつ保育観

や子ども観を問い直していこう。やつとそうのように思えるようになった。そしてまた逆に、自分の視点に近い保育者との話し合いにおいて、共感しすぎてしまう場合に

も、自分の視点や感情を検討する必要があることに改めて気づいた。こちらの方が必要性を感じない分だけ、実は難しいことなのかもしれない。

ともかく、このように動き出したのであるが、未熟な私が子どものかたわらにいる大人のありようを考えるという織物をどのように保育者たちとの共同作業によって織り上げていくことができるのだろうか。不安でもあり、また楽しみでもある。一方の糸として存在できるように、少なくとも自分を問い直し続けることを忘れずにいたい。

(大妻女子大学)

引用文献

メルロ＝ポンティ『知覚の現象学2』みすず書房 一二九頁
尾崎新『ケースワークの臨床技法』「援助関係」と「逆転移」の活用』誠信書房 一四九―一五三頁